庭園 協会ニュース 第86号

一般社団法人 日本庭園協会
東京都新宿区西早稲田 1-6-3 フェリオ西早稲田 301
〒169-0051　TEL:03-3204-0595（FAX 兼用）
E-mail : gsj20@m7.dion.ne.jp　URL : http://nitteikyou.org/
編集者：広報委員長・柴田 正文
　　委員・小沼 康子、加藤 精一、内田 均
題　字：故・上原 敬二
発行日：平成 28 年 11 月 30 日

一乗谷朝倉氏遺跡　唐門前にて

「庭園の鑑賞研究」
―複合領域科学の視点から

藤枝 修子

日本庭園協会は１９１８（大正７）年12月に東京帝国大学本多静六教授ほかの先駆者を発起人に任意団体「庭園協会」として創立された。その翌年には機関誌「庭園」が発刊され、日本庭園に関する研究会・講演会・見学会・図書の刊行などが行われました。１９２３（大正12）年６月には、協会創立５周年を記念し、また会員千名達成を祝して、第１回庭園鑑賞会が岩崎邸清澄庭園で開催され、名称が「日本庭園協会」に改称されたことは多くの方々の知るところです。その後、戦争の影響を受けながらも、１９７８（昭和53）年日本造園士会との合併により、組織の整備も図られ、鑑賞研究部と技術部会が発足して、今日の組織の骨格が出来上がったとのことです（注）。そして、（一社）日本庭園協会は２年後に創立１００周年を迎えますが、このときに会員であることの幸せを感じます。

ところで、庭園を鑑賞研究するとは、何をどうすることだろうか？日本庭園に惹かれて日が浅い私に、先輩からは生意気を言うなと言われそうですが。日本庭園は、自然の美・癒しの要素、すなわち、その精神性にも言及されます。庭園の美しさや安らぎを実感するためには、庭に対峙する自分自身が肝心だと最近は考えます。歴史的庭園であれば、造られた時代的、宗教的、文学的背景も学んでおきたい。作庭の要素になる岩石学、地質学、地形学、水利・流体学などの科学的基礎知識、樹木の種類・性質・生育の特徴、また季節と時期・時刻や降水量・湿度、太陽と月の動きにより庭園の顔は変わって見えます。雨にぬれた苔は光って見え、雨上がりに木々の葉から落ちる水滴はダイアモンドのように輝いています。同じ庭園でも、時期と時刻によって見学者と共鳴し合うものが大きく変貌するように感じ、複合領域科学の事例だと考えています。

最近は集合住宅に住むことが多くなり、個人的に庭をもつことが難しくなってきましたが、庭を楽しむ心、庭を楽しみたいと思う心は今後とも持ち続けたいと願っています。（理事　鑑賞研究部委員長）

注：（社）日本庭園協会95周年「庭園鑑賞のあゆみ」（２０１４（平成26）年３月）

第8回　庭園技術連続基礎講座の報告

第8回庭園技術連続基礎講座に参加して

細井　薫

前々より講座のご案内を興味深く拝見しておりましたが都合がつかず、今までは意欲ある学生に紹介してはその様子を伝え聞いていました。今回は、ようやく全回とも都合がつき、自身での参加となりました。

この講座の魅力は何と言っても普段なかなかお会いすることのできない方々のお話を身近に伺えること、また交流ではないでしょうか。講師自身も魅力ある方々であることはもちろん、その方々がお話しされる先人たちのお話の貴重さ、そしてその方々に直接お話を伺いながら各所を巡れる贅沢さ。

〈庭に向かう私の姿勢〉では講師に女性を迎え、今までとは違った視点で庭に関わる方々のお話を伺うことができました。

中山先生には、以前管理されていた旧古河庭園の改修工事の一端を伺うことができました。旧古河庭園は、現代の一般住宅ではないものの、都内で適度な規模に名建築・洋風庭園・日本庭園が揃い、学生が庭園様式を学ぶにはよい素材のひとつです。

それから龍居先生をはじめ講師陣が語る先人たちのお話が生き生きとしていたこと。歴史上の人物である上原敬二先生が時代を生きた〝人〟として実感できたように思います。

高橋会長ご案内の芝公園では、公園について再認識することも多く、戦火を受けたイチョウやカラコギカエデの存在も知りました。

一方、重要文化財・名勝の維持の大変さを実感するとともに、若者たちを業界につなぐ立場から、彼らがこの講座を受けてわかるのか、役立てられるのか、考えさせられました。

主催者に要望です。ひとつは5回まとめての申し込みについてです。準備の都合等難しい面もあるとは思いますが、勤め人にとって半年先まで5回の予定をおさえることは難しい。やむを得ない場合みなさんお休みされていましたが、単回申し込みや途中申し込みも検討し、申し込みの心的？ハードルをもう少し下げて頂けたらと思います。また、貴重なお話の数々、受講できなかった者にも有料のネット配信やDVD化をするなど、時代に合わせ学べる方法を考えて頂けないでしょうか。

庭園技術連続基礎講座も早8回を終了しました。講座が今後どこに向かうのか、あるいは「基礎講座」ということは、いつしか上級講座もできるのか、楽しみです。

（維持会員　テクノ・ホルティ園芸専門学校勤務）

浜離宮恩賜庭園にて

●第1回　5月29日（日）
〈庭に向かう私の姿勢〉講演…藤枝修子
〈先人の道〉
「小宮山博康の世界」講演…遠藤太一
〈庭園実地見学〉
「旧岩崎邸庭園」解説…松井修一

●第2回　6月26日（日）
〈庭に向かう私の姿勢〉講演…中山なつ希
〈先人の道〉「中瀬操の世界」講演…三橋一夫
〈庭園実地見学〉
「浜離宮恩賜庭園」解説…中山なつ希

●第3回　7月31日（日）
〈庭に向かう私の姿勢〉講演…山崎誠子
〈先人の道〉
「飯田十基　川崎幸次郎の世界」
講演…江夏大三郎
〈庭園実地見学〉
「目白庭園　おとめ山公園」解説…小沼康子

●第4回　8月28日（日）
〈庭に向かう私の姿勢〉講演…服部マリ
〈先人の道〉
「上原敬二の世界」講演…龍居竹之介
〈庭園実地見学〉
「明治神宮」解説…龍居竹之介

●第5回　9月25日（日）
〈庭に向かう私の姿勢〉講演…小沼康子
〈先人の道〉
「長岡安平の世界」講演…高橋康夫
〈庭園実地見学〉
「芝公園」解説…高橋康夫

平成28年度　伝統庭園技塾
東日本大震災復興記念庭園築庭

平成28年10月11日～15日
宮城県大和町　覚照寺

伝統庭園技塾4年目をむかえて

浅野　廉裕

伝統庭園技塾「東日本大震災復興記念庭園築庭」は今年で4年目を迎えることができました。技塾初日に東日本大震災復興記念庭園の概要や思い、これまでの道のりを説明する技術統括の横山英悦氏の講義がありました。その中で築庭着手以前の現場の映像を見ました。まさに、辺り一面藪の映像でした。そんな人も入って行けないような藪が、現在、庭園としての形が見えつつある状態にまでなっているのですから、本当にすごいことになっているなと感動してしまいました。

今年も30名を超える庭師の方々に全国から参加頂きました。その中には初年度から参加している方、今年が初めてという方、さらには前年に続きアメリカからも参加頂きました。昨年までの技塾では、5日間を通して同じ工種で作業をしていましたが、今回の技塾では「石材加工」「護岸石組」「植栽工」「園路工」の4工種を4班編成で1日ごとに工種をローテーションする事で作業の内容に偏りが出ないようにしました。参加者にも好評だったと思います。

来年は「東日本大震災復興記念庭園築庭」の節目となる5年目になります。幽玄な雰囲気の中、滝から水が流れ落ち、緩やかな流れを通って池に水が張られ、水面に借景の山々が映し出される。そんな姿を皆で見られればいいなと思っています。来年も多くの方々の参加をお待ちしております。（正会員　宮城県支部）

石樋と座り石作り

忘れることのできない経験

安斉　康成

私は第4回目となる今回の技塾より参加させて頂きました。スタッフや参加する塾生など初めてお会いする方々ばかりでしたが、会場に到着すると皆さんが暖かく迎えて下さいました。

会場は辺りを山の自然に囲まれた素晴らしく気持ちの良いところでした。しかし過去のお話を聞くと、当初は人の入れる状況ではなく、ましてや庭を作るなんて想像もできない状態だったということです。今はそのような状態だったとは想像できないほど庭園が仕上がってきていました。私は今回からの状態しか目の当たりにしていませんが、スタッフ・ボランティアの皆様のおかげでこの恵まれた環境で作業できるということを忘れずにこの5日間やっていきたいと思いました。

今回は例年と違い、日替わりで担当する作業が変わるということで、私達の班は植栽と石材加工、護岸石組をさせて頂きました。作業の内容は、山掘りしてきたモミジなどの植栽、シダの植栽、水鉢に水を流すための石樋と座り石の制作、中島の護岸石組や庭石の据え直しなどで、初めて経験する作業もあり、苦戦しま

山掘り根巻きしてきたモミを中島へ植栽

二段石樋の設置

したが、講師の方々の指導のおかげでうまく成し遂げることができました。ただ石樋の製作中、石をはつっているときに石を割ってしまうという失態をおかしてしまいました。小泉隆一講師と横山英悦統括に「大変申し訳ございません」と言うと、「かえって味が出てきていいよ」と励ましの言葉を頂きました。後で石には石目というものがあることを知り、石を加工する際は、石目の方向に気をつけなければいけないことなど、失敗から得ることも多く記憶に残る経験となりました。今後石材を加工するたびに今回のことを思い出すと思います。最終日に制作した石樋が庭に入り水鉢に水が流れるのを見たときに、この仕事のやりがいをとても感じました。また内田均講師、高橋康夫講師の特別講義では大変興味深いお話を聞くことができました。

このような経験をさせて頂く機会をもうけてくださいましたスタッフ、ボランティアの皆様、本当にありがとうございました。また今回共に作業をしました皆様、ありがとうございました。この5日間、講師の方々から知識や技術を伝授していただき、とても充実した日々を送ることができました。

（非会員　青山造園）

伝統庭園技塾に参加して

黒森　海斗

私は、宮城県大和町の宮床地区にある覚照寺で5日間に渡って行われた平成28年度第4回伝統庭園技塾に3日間、今回初めて参加しました。今年の3月に大学を卒業してから、一人親方のもとで働く私にとっては庭園技塾のように大きなスケールのものを、大人数で造るという経験はなかったため緊張しました。講習は参加者が班編成され石組、植栽、園路工などの工程を班ごとで日替わりに受講するというものでした。

私が印象に残っているのは、作業1日目の植栽を担当しているときでした。作業内容は崩れ積みの石と石の間にシダを植栽するというものでした。作業をしていると、塾長の廣瀬慶寛先生から、シダを植栽する際にシダの向きを意識してほしいとのご指摘がありました。植物は光のある方向に成長していくので、それを考えると植物の表と裏がおのずと見えてくる。当たり前のことだがそういった自然だったらどうか、意識することで山とのつながり、空間のつながりが出来てくるというお話でした。このご指摘で、自然を観察することが、庭をつくるうえでとても重要なことであると学びました。そして庭とは部分だけではなく全体として捉えるものなのだと学びました。今回の体験からいうと、シダの植栽だけではなく周りの石や樹、光や影、風、そこから生まれる音など広く空間を捉えることが重要なことだと学びました。

そして今回の伝統庭園技塾を受講して驚いたのが講師、参加者の方々の人間力でした。作業中の休憩や打ち上げのときに話してみると皆さん、接していてとても気持ちの良い方々でした。また「庭」というものに対する姿勢も素晴らしく、とても刺激になりました。私も次回の伝統庭園技塾に向けて、今回学んだことを活かし、人間力を高め、臨みたいと思います。

（宮城県支部会員）

崩れ石積みへのシダ植込み中

技塾終了後、講師陣による洞窟岩組の作製

研修会場前にて参加者一同

鑑賞研究部　夏期庭園見学会

「初夏の一泊見学会
―越前の文化財庭園を巡って―」

平成28年7月12日～13日

福田　光子

梅雨の合間を縫って7月12、13日、越前の山間に位置する名勝庭園を巡る見学会を催しました。龍居先生と奥様ご同行のもと、参加者20名で旧北陸道宿場町の名残を留める北陸本線今庄駅から出発しました。

最初に向かった「伊藤氏庭園」は医を業とした邸宅の築山林泉式座視鑑賞庭園で、享保年間当時流行した庭園図本を規として造られました。県下でも著しい豪雪や、明治中頃の火災により、庭木の多くが損傷を蒙ったが、肝心の地割や石組みは当時の相をそのまま留めており、この庭の見どころです。この庭園に面する座敷から眺めれば、山林とその山裾に築かれた庭園の素晴らしい調和は如何ばかりかと思いました。

伊藤氏庭園

紫式部公園

次に向かった「紫式部公園」は、紫式部が一時武生に暮らしたことを記念して、平安時代の寝殿造り建築と庭園を再現して盛込み、昭和61年に開園した3千坪の公園です。庭園史家森蘊氏が設計した庭園は、建築史家太田博太郎氏が設計した釣殿と共に、教科書で学んだ平安時代の貴族の生活を推しはかるのに興味深いものでした。

3ヶ所目は、平家一門の菩提寺として名高く、謡曲「花筐」の発祥に縁があると伝わる「城福寺庭園」を訪ねました。元禄年間に作られた、借景築山式蓬莱枯山水式の苔庭で、拝観石も見事に配置され、京都円通寺の庭園と並び称せられる国指定の名勝です。築山は、能の「花筐」に出てくる桜塚と云われ、今は柊が茂り、白い花をつけるとのことでした。庭全体の印象はやわらかく、柊の花が咲いた時の風情は、桜にも劣らないだろうと思われました。

三田村氏庭園

4番目に訪問した「三田村氏庭園」は、戦国時代から越前和紙と深く関わってきた和紙商の元締めで、徳川幕府や福井藩へ御用達してきた紙匠の庭園。築山泉水庭として旧態が保存されていることが、往時の絵図資料から分かる点で、芸術上、庭園史上貴重であり、昨年、国の名勝に指定されました。

初日最後の訪問となった「梅田氏庭園」は、豪族で大庄屋としても力を誇った梅田氏の居館庭園でした。かなり山深くに位置し、日も少し傾いた時刻の訪問となりましたが、庭園への入口の木戸が開くと、そこだけに特別の光が射しているの

梅田氏庭園にて

かと思うような緑の光景が目に飛び込んできました。全体の構成と石組みの手法には、格調高い室町末期の特色がよく保存されており、この地方における庭園文化の伝搬を知る上で貴重な作品とのことでした。老木の樹林と庭一面が苔に覆われた光景は、神々しいとも感じる美しさで、人と自然と年月が造ったこのような美しい庭が、世界で他にあるだろうかと思いました。

2日目は大雨の予報でしたが、雨傘を日傘に変えての見学となりました。最初に訪問した「養浩館庭園」は、福井藩主松平家の別邸で「お泉水屋敷」と称されていましたが、明治になって現在の名称になった庭園です。江戸時代中期を代表する書院建築と回遊式庭園として知られていました。庭園は大正時代に小学校が立つなどで荒廃し、建物は空襲で焼失しましたが、名勝指定を機に8年かけて復元整備、平成5年に完成・公開されました。以前を知る龍居先生は、よくここまで整備したものだと感慨深く話され、立派な大名庭園を鑑賞することができました。

梅田氏庭園

朝倉氏庭園

本見学会最後の訪問先「一乗谷朝倉氏庭園」は、戦国大名として一乗谷で五代百年の栄華を極めた朝倉氏の遺跡の中から掘り出された庭園で、湯殿跡庭園、南陽寺跡庭園、諏訪館跡庭園、朝倉館跡庭園を見学し、さらに唐門、館跡、中御殿跡、復元された武家屋敷などを見学しました。4つの庭園は、後世の改変がなく、室町時代末期の庭園様式をよく伝えているために、国の特別史跡になっています。一面、夏草と苔が茂る緑の広大な谷に残る、一目で石組みの力強さに圧倒される庭園を見て、そこにどんな建物や生活があったのかと想像を掻き立てられました。

今回も龍居先生の広く深いご見識とご経験から組み立てられた見学旅行から、日本庭園の奥深さを改めて認識しました。お世話になった皆様に改めて感謝申し上げます。

（理事　鑑賞研究部）

アメリカの日本庭園教育セミナーに参加して

三橋　一夫

当協会と親交の深いオレゴン州ポートランドの日本庭園は、庭園を通じての教育活動の一環としてアメリカ国内の日本庭園の専門家に対する日本の文化や芸術を更に指導、教育することに熱心であり、その発信元として長年に渡りプログラムの企画を練ってきた。

この活動の核となっている学芸員の内山貞文氏から連絡があり「来年、本格的に開講する前に、8月末から一週間モデルセミナーを開催するので、このセミナーの講師として手伝ってほしい」との依頼があった。テーマは「技と心―茶の文化と茶庭での石の扱い」ということである。他の講師は京都の「植彌　加藤」の加藤友規氏と加藤武史君、「茶と和の心」を教えるイリノイ大学の郡司先生、茶の点前はジャン・ウオルドマン氏という顔ぶれで、選ばれた生徒は11名。いずれもアメリカ国内でも有名な日本庭園のトップガーデナー達であり、それぞれ多くの部下を持っているというプロフェッショナルな人達である。彼らは日本庭園を管理するのが仕事であるが、いずれの庭も日本人が関わって作られたものであり、彼らが自ら庭を作ったという経験はないので、「作業中ではあっても、なぜ、どうして、というディスカッションをしながら進め

欲しい。また、彼らが各々の日本庭園という職場に戻って部下達に教えてあげられるように、という要点を頭に入れて指導して頂きたい」というのが内山氏の希望であった。セミナーは6日間、その内3日がワークショップである。セミナー前夜は庭園内に於いてウエルカムパーティー。参加者のほとんどがシンポジウムなどで顔なじみであり互いに旧交を温め合った。

初日の講座は庭園内の茶室「華心亭」での茶会で始まり、次いで加藤氏の「作庭記」ついての話。私は今回のセミナーのテーマである「つくばい、飛石、延段、茶庭」のデザインと構成について、今迄撮影した多くの写真を使い説明をした。話の主旨は各々の事例のデザイン性に触れるのと同時に「つくばい」は何の為に作り、どう使うのか、その良し悪しとどう管理したら良いのか、庭の一画として「つくばい」周辺の景色の作り方などについて考えを述べた。翌日から3日間は郊外の「スミス・ロック」という大きな石材会社の敷地内でのワークショップで、水鉢や道具類はガーデン側で揃えてあり、その他必要な石材は商品も含めて置場内にある物は何でも使ってよろしい、ということであり、全員で商品や材料を見て回った。オレゴン州は庭石の良いのが手に入る地域であるが、それが商品として売れる、と認識させたのは、その石を使い始めた日本人造園家達のお陰と、恩に着て、今回のように石材や場所を提供してくれているとのことであった。受講生は既に3班に分けられており、私の組には、フロリダのモリカミ庭園のハーザー、フィラデルフィア・松風荘のフランチェスカの女性二人とシカゴのアンダーソンガーデンのティム、カルフォルニアの箱根ガーデンのジェイコブ、いずれもベテランのガーデナー達である。特にフランチェスカは昨年と今年も宮城での技塾に参加する程、熱心な女性である。ワークショップを始めるに当って先ず用意された水鉢のどれを使い、どの場所で作業するかを決めた。先ずはメンバーが現場に立って与えられた課題の平面図を元に、どのように設計を解釈し、どう完成した景をイメージするか、スケッチをしてもらい、各人の意見を十分に聞いた上で、場内の石材を改めて見て回り使う材料を選ぶ、この選択の基準は、渋く、味わいのある物とし、役石、飛石、延段の石を、「ああだ」「こうだ」と意見を交しながら選び、現場に運ぶ。材料の選び方、揃え方、数などを決めさせ、初日は選んで手元に運ぶ作業とそれらの材料を見ながら現場の背景や位置関係を決めるのに充分過ぎる程の時間をかけた。スケッチの形もより具体的になり、作業も早く進められることになる。毎朝作業前に郡司先生の「和の心」の講義を受け、お菓子と薄茶を頂く、という誠にぜいたくな時間を楽しむ。先生は長年イリノイ大学で日本文化について教えられておられるので要点をおさえ説得力がある。この時間をプログラムに入れたのは内山氏が庭づくりに必要な「和の心」を更に深く理解させたいという今回のセミナーの眼目の一つであろう。

三橋一夫講師と担当したグループの方達

2日目、水鉢、役石を据えるにもそれぞれの高さ、バランス、石の表情、風情などをどう決めて表現してゆくか、意見を出し合って形を作ってゆく、飛石、延段についても一通りのセオリーを説明して作業を進めて行くが、時にはあえて悪い例を作りそれらを修正させることによってより理解を深めることになったと思う。課題の形は一応整ったが何か物足りないので場内の石垣の一部を取って、景石として使うことにし、議論しながらそれらを据え、デザインの広がりを図った。完成した作業を前に、今回のセミナーの主旨である「考えながら、議論しながら納得して形にしてゆく」という目的は果たせたろうと思った。作業終了後の講評については講師がそれぞれ

議論しながら作業をすすめる

の作品の意図を説明したが、私は生徒達に話す時間を与え、自分達が何を学び、何を感じたかを他の受講生達に説明してもらった。こうすることによって他の班の人達も我々が学んだ事を共有できたのではないかと思う。作業全体の講評を内山氏がして、3日間に渡るワークショップは無事終了した。翌日はスタッフ他の関係者も参加してセミナー全体の感想を話し合った。話は多岐にわたり大変に内容豊かな質の高いものであったと思う。このような運営方法を是非当協会の技塾や講習会でも活かしてゆければと考える。今後、アメリカ側のこのような教育指導のシステムに我々の協会も大いに協力し、若い人達もいずれ講師として派遣できる道筋を作って行きたいと考えている。その日の為にも外国からの期待に応えられるよう、庭の技術ばかりでなく、日本の文化、茶道の知識と建築やアートに至るボキャブラリーを増やすことが望まれる。今回のようなセミナーや大会に出席する目的で外国へ行く度に、日本庭園ほど日本文化を伝える媒体として、彼らに期待されている大きな存在はない、ということを改めて認識したことを結びに申し上げる。

（理事　国際活動委員長）

良き兄貴・伊藤邦衛さんを思い悼む

龍居　竹之介

「よく三味線なんて弾くな、女みたいだなあ、そんなに面白いか」

昭和24年の話である。伊藤邦衛さんが清水建設の勤め帰りの夜、我が家にやってくるとき、不思議と私が長唄の三味線の稽古をしていることが多かった。するとこんなことをいって、すぐ小馬鹿にするのが常だった。

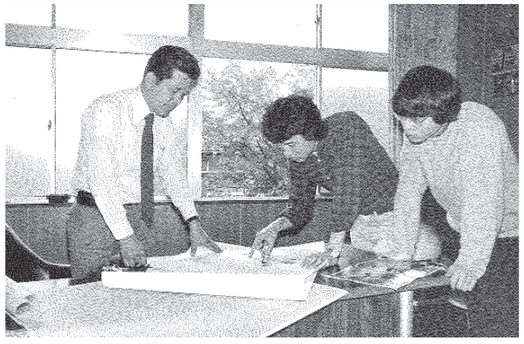
「面白いさ」とこっちも応じながらお茶の用意をする。そして親父（龍居松之助）がお茶を点てる。雑談が始まる。ときにはここに邦衛さんの先輩で上司でもあった清水友雄さんも加わった。車座になって時間を忘れてしゃべった。

話の中身など覚えてはいないが、復活を目指す庭園協会の会員名簿づくり用のカードボックスづくりについてなにかと云い合ったのもこうした一夜のことだったようにも思う。

いや、あれはそのために集まったときだったかな、いずれにせよともかく楽しかった。

戦後の復興にまず欠かせなかったのは住環境の整備である。身近な小住宅づくりの出版物が目立ちだすと、それに付属する庭づくりにも日の目が当たった。この波には乗るべきだと考えた清水さんとともに邦衛さんは持ち前の才気を発揮し、編集者然と庭づくり本や記事の企画にまで参加して知恵を絞った。

大正時代生まれの諸先輩に先んじて作品集をまとめた下地は、こうした経験にあったと思う。一方で住宅の庭づくりの体験から得た独特の材料選び、現代人の感覚に沿ったデザインの追求は、公共作品の上にも開花した。



事務所のスタッフと打合せする若き日の伊藤邦衛さん（左端）

同時に施工者の技のエキスもよく吸収してきた。蛭田貫二さん、吉村金男さん、清水長寿さんたちとの仕事の感想からそれは窺われた。そうしたことが後年、文化財庭園への関心を深める一要素にもなっている。

そして私には、そうした邦衛さんの魅力が一杯詰まった作品こそが、地元の荻窪に生れた大田黒庭園のように思われてならない。

邦衛さん、一足先に逝かれた奥さんとご一緒に、いまごろはゆっくりとこの庭の美しく色づき始めたイチョウ並木の前庭を、散策なさっているんじゃないですか。今年、平成28年の年賀状で拝見した仲睦まじいお散歩中のスナップ写真のように。

そういえば、ご結婚のご挨拶にお二人で家に見えたときは三味線の稽古はしてませんでしたよ。さようなら邦衛さん。さびしいです。

伊藤邦衛氏は本協会名誉会員。平成28年9月29日死去。享年92歳

（名誉会長）

庭園協会ニュース85号　訂正

庭園協会ニュース85号9ページで山田昌次氏が亡くなられたのは5月2日と記載しましたが6月2日の誤りでした。訂正してお詫び申し上げます。

平成28年度　**支部活動報告**　北海道南支部／石川県支部

北海道南支部
青森　大石武学流庭園見学研修会
平成28年5月14日～15日

近くて遠かった庭園への旅

桃井　雅彦

この研修の始まりは前支部長の外山正幸氏と龍居竹之介先生のお話からでした。龍居先生の「あなた方は青森の隣だけど武学流の庭をあまり観たことがないでしょう」の言葉に、まさに函館は海を挟んで隣ですが近くて遠い青森で中々訪れることが出来ませんし、少しでも武学流の庭について理解できればと思い企画しました。

さて、研修当日皐月晴れの新函館北斗駅よりこの春開業した北海道新幹線に乗り1時間ほどで新青森に到着。龍居先生が到着するまで時間があるので三内丸山遺跡を見学し、参加者の皆さんには一時、縄文時代に思いをはせて頂きました。新青森駅にて龍居先生ご夫妻をお迎え後、地元会員の藤崎造園　兵藤勝幸氏と合流し平川市の清藤氏書院庭園・盛美園に向いました。清藤氏書院庭園にて当主よりご解説頂きました。盛美園に付随する建物の盛美館にて昼食を取らせて頂き、建物2階部分（展望室からの眺めは普段見ることのできない景色です）から庭園を一望した後、当主の解説に出てきた猿賀神社を見学しました。その後、黒石市の金平成園（澤成園）へ赴きました。一般公開の期間が終わった後でしたが、兵藤氏の御蔭で見学をさせて頂くことができました。市の担当者の鈴木氏より30分の予定のところ1時間近くも熱心に解説をして頂きました。庭園側面の門より出て、黒石市の町並みを眺めながら徒歩で次の見学場所の鳴海家庭園（鳴海酒造店）の座敷より庭園を見学。酒蔵で美味しいお酒を試飲して心持が良くなったところで宿泊先の弘前市へ。慌しい初日になってしまいましたが懇親会で弘前の夜は更けてゆきました。

清藤氏書院庭園・盛美園

見学会2日目、参加者皆さんの普段の行いが良いのか快晴で、まずは、弘前城内で大石武学流見本庭園、三ノ丸庭園を見学。ここで龍居先生の考察を伺い、弘前城の天守閣石垣修復のために曳屋された天守閣を見学し、旧藤田家別邸庭園に移動し見学。旧菊池氏庭園（弘前明の星幼稚園庭園）を見学後、翠明荘で昼食を頂きました。翠明荘の庭園は武学流の庭ではありませんが函館の名勝旧岩船氏庭園と作庭者が同一人物（辻地月氏）と思われるので、興味深く拝見させて頂きました。昼食後、瑞楽園へ向かい管理の方より解説頂き無事に見学会を終了することができました。

今回の研修会では、時間が短くて落ち着いて見学することができませんでしたが、参加者皆さんが武学流に関して多少なりとも知見を広げて頂ければ企画した甲斐があったのではないかと思います。出来れば支部以外の参加者も募りたかったのですが、企画に手間取り募集することが出来ず残念でまた申し訳なく思います。最後になりましたが、龍居先生ご夫妻、兵藤氏、各庭園の関係者におかれましてはお忙しい中お付き合い頂き誠にありがとうございました。お礼申し上げます。

（正会員 北海道南支部 副支部長）

弘前城植物園大石武学流見本庭園

大石武学流庭園見学会にて

松倉　裕二

北海道南支部では、研修旅行として平成28年度は、5月に龍居先生を招いて青森県の会員兵藤さんのご案内で、清藤氏書院庭園・盛美園、金平成園、瑞楽園などを見学してきました。

清藤氏書院庭園は大石武学流庭園美の源、手本となった随一の名園であり、現ご当主より作庭当時の様子をお聞きし、それまで自分が思い描いていた庭園美だけではない、人間味のある何かを感じることができました。そして、庭園を鑑賞するために建てられた盛美館にて、特別に昼食を頂くことができ、ゆっくりと鑑賞させて頂きました。盛美館の2階からは全庭を見渡すことができ、まるで空中に浮いているような感覚になりました。明治時代に建てられた和洋折衷の洋館の盛美館はジブリアニメのモデルにもなったとのことで、その作品を鑑賞してもう一度訪れてみたいと思いました。きっと今回とは違った思いが湧いてくるのではないかと思っています。金平成園では、石組の荒々しさに感銘を覚えました。瑞楽園では、母屋から座して望む見事な風景は、日常生活を忘れさせ心を穏やかにさせてくれました。

瑞楽園

今回の研修旅行では、大石武学流庭園の特徴としての、石の使い方のダイナミックさも然ることながら、造園や庭園美の他にも、石の運搬手段に牛や馬を使わず、わざわざ人力で運び、多くの人手と歳月を要するように大きな石を使ったということを知り、当時の庭作りに隠された本来の意図にも触れたような気がしました。

（正会員　北海道南支部）

移設中の弘前城天守閣前にて

石川県支部
金沢仕様のアカマツ剪定講習会

いこいの村　能登半島
平成28年7月2日～3日

金沢という風土

木守　康二

私は「○○限定」「○○モデル」という表現に弱い。『「金沢仕様」のアカマツ剪定』というフレーズを耳にした時には、もちろん食いついてしまった。毎年、クロマツ・アカマツの剪定はさせて頂いているが、もっと良い手入れはないのか、他の職人さん達はどのようにやっているのか等、常々思っていた。

講習会当日、会場に向かう道中の風景は素晴らしかった。遠くの山まで続く青々とした水田、海岸沿いに走る松林を見て、すがすがしい気持ちのまま会場に着いた。昼食を済ませ、身支度して、講習が始まった。最初30分程度説明があり、その後実践という流れだった。一本のアカマツに一人の講師指導の下3人が取りかかった。金沢仕様というのを一言で説明すると、積雪を考慮した剪定法ということのようだ。当地で降る雪というのは湿っていて重いのだそうだ。立ち芽をほとんど残さず、雪が落ちやすくなる様に枝を透かして剪定するのだ。私が普段通りの剪定をしていたら、やはりご指導を頂いた。「そこの枝は重なっているから切って」「そこは元から落として。いやもっと元から」等々。いつもの感覚と比べたら枝を抜き過ぎているので違和感があったが、それが金沢の風土に合った剪定法であるので納得はいった。刺激を受けつつ、楽しみつつ、あっという間に一日目の講習会が終了した。

作業前に円陣を組んで説明を聞く

指導にも熱が入る

その晩、懇親会は大いに盛り上がった。講師の方々が順々に回って下さり、色々な話をする事が出来た。また、同じ宿泊部屋の方と深夜遅くまで熱く語り合った。

2日目は朝食をみんなと一緒に食べてから、私の勝手な都合で先に失礼させてもらった。

今回の講習会の様に、地域特有の技法というのを現地の職人さんに直接指導して頂いた事に意義があったように思う。今後も勉強し向上して行きたい。

終わりに、石川県支部の皆様には大変お世話になりました。また、武部外喜寛前支部長を偲ぶ会において、奥様から瀟洒な手拭いを頂き、この場を借りて感謝申し上げます。

（正会員　山口県支部）

加賀、能登地方のアカマツ手入の手法を説明する松本清講師

加賀の手入れ文化

野村　光宏

先日ある御宅で大きなサクラの木を仲間と二人で剪定していた時の事、「止めまくらないで柔らかく、出し返しで行くから、幹からの枝の出方を良く見て手先（剪定後の枝先）を決めて長いのを外すから…そうそう、その渡っている枝も切ってくれる…そう、脇枝が長いと懐に日が入らないから少し摘めて…」私のところの手入れ風景であるが、恐ろしいほどに金沢仕様が入り込んでいる事に気が付かされる、それもさらりと…。

暑くなり始めの7月2日、3日、石川県能登にて石川県支部主催の「金沢仕様のアカマツ剪定講習会」が行なわれました。参加したきっかけはGSJミニニュース。総会の時も話は聞いていましたが「今更手入れの講習会か」という自分と、「もう少し手入れの確信がほしい」自分がいました。それを後押ししたのは「急逝された武部外喜寛相談役を偲ぶ会」です、数年前初めての支部長会で若輩者の私に気さくに声を掛けて頂き慣れない席での私は大変有難く思いました。まさかこんな事になろうとは…。金沢へ行こう、武部さんが世間に伝えたかった事を聞きに。

「まず、当地においては冬場の湿った重い雪を考えて…」「おい、悪い枝だからって全部切っちまったら、味も色気もねぇーじゃねぇか」と、講習会のひとコマである、今回講師を務めて下さった方は松本清氏。「加賀、能登における赤松手入れ手法」と題しての技講、惜しみなく指導頂いた事、感謝致します。手入れの事もそこそこ判っていたつもりですが、改めて答えがひとつで無い奥深さを感じさせられました。

現代社会の住宅事情からいって樹木がのびのびと出来る場所が少なくなった昨今、放置すれば数年の後、日照や落葉問題、枯技の危険により近隣より苦情が出て樹木生命が脅か

切枝を使って鋏の入れ方を説明する宮本広之講師

される事となる。少しでも木々が長生き出来る様、社会適応性をつけながら美しく維持して行く事も植木屋としての使命と考える次第です。石川県支部の皆さんお世話になりました。

（評議員　埼玉県支部長）

この枝を→

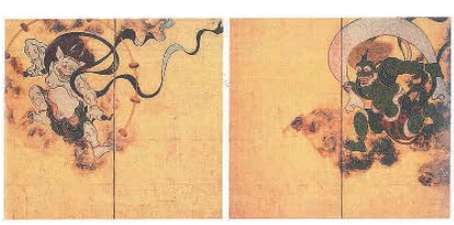
こうする

編集委員コラム

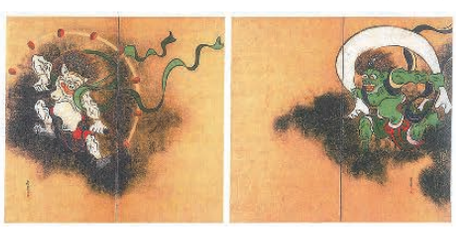
木になる葉なし 5

柴田　正文

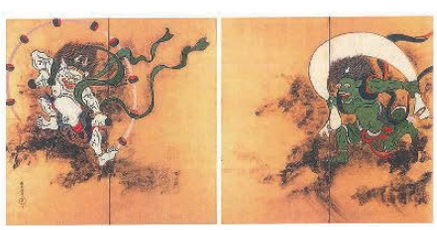
今となっては旧聞に属するが、オリンピックエンブレム問題として「パクリ」疑惑が騒がれ「オリジナル」とは何かが論議されました。その時、「琳派」の絵画が頭をよぎりました。俵屋宗達、尾形光琳、酒井抱一それぞれが「風神雷神図屏風」を描いており、画題も構図もほとんど変わらない「模写」がなぜそれぞれ評価されているのだろう。現代でも大人気の琳派は江戸初期の本阿弥光悦、俵屋宗達に始まり尾形光琳、酒井抱一へと続くが宗達と光琳、光琳と抱一の間には約１００年の隔たりがあり直接の師弟関係は無かった。琳派とは大和絵などの平安文化を土台にし、水墨画の手法を加味した独自の様式を持った絵画を指す言葉で、後世の鑑賞者の命名だが、その系譜は江戸から明治にかけての神坂雪佳から日本画へとつながり、絵画のみならず染色や工芸などの意匠に転用され町衆文化の発展に寄与した。これほど早くからデザインという概念を持っていたのは世界でも稀有のことだという。構図の面白さ、余白、光琳模様、キャラクター化など現代のグラフィックデザインにも影響を及ぼしている。師弟関係を持たない琳派にとって模写が継承の形であり「私淑」の表明表明だった。模写とは作者の思いを追っていく作業という。そして、広辞苑によると【私淑】（ししゅく）尊敬する人に親しく教えを受けることはできないが、ひそかにこれを模範として学ぶこととあり、フランス語の「オマージュ」は芸術や文学においては尊敬する作家や作品に影響を受けて似たような作品を創作することで、しばしば「リスペクト」（尊敬、敬意）と同義に用いられる。どうもその辺がパクリとオマージュの境界線なのかもしれない。ついでだが、親しくその人に接してその感化を受けることを【親炙】（しんしゃ）という。一方「著作権」という観点からみると、原画に対し「精神的創作行為」が認められた場合、二次的著作物として新たな著作権が発生するという。パクリとオマージュの境界線はどこにあるのか。私達、庭づくりに関わる者にとっても考えるべきことではないだろうか。連綿と受け継がれてきた日本庭園のかたちやそこに関わる人達に接し、私淑できる人に出会うか、運よく親炙できるかは本人次第。オリジナルを目指し、自己を高めていくことが大事だと思う。本協会でも様々な研修会、講演会、見学会などを企画実行しているが、特に若者達には参加して体験することで「自分という資産」を育んでいってほしいと願っている。



俵屋宗達「風神雷神図」



尾形光琳「風神雷神図」



酒井抱一「風神雷神図」